GSI Week 2023

国際シンポジウム

先住民族と博物館

～ 先住民族の声を紡ぐ ～

2023 年 12 月 3 日（日）

北海道大学学術交流会館講堂 & Zoom

プログラム

09:40	開　場
10:00-10:05	開会のことば **加藤 博文 教授**, 北海道大学先住民・文化的多様性研究グローバルステーション(GSI)代表
10:05-10:10	**在日オーストラリア大使館**からのメッセージ
10:10-10:15	アイヌ代表挨拶 **鵜澤 加那子 博士**, 北海道大学、オスロ大学
10:15-10:45	沙流川流域のカムイユカラ（神謡）**矢崎 春菜 氏** & オーストラリアアボリジニからのレスポンス
10:45-11:05	プレゼンテーション 1「国立アイヌ民族博物館のアイヌ語に関する取り組み」 **矢崎 春菜 氏**, 公益財団法人アイヌ民族文化財団、国立アイヌ民族博物館
11:05-11:25	プレゼンテーション 2「祖父、父、私それぞれの役割を持って」 **山丸 賢雄（ケニ）氏**, 公益財団法人アイヌ民族文化財団、国立アイヌ民族博物館
11:25-11:45	プレゼンテーション 3「アイヌ民具と共に踊る－博物館アイヌ民具コレクションの中から見えてくるアイヌらしさとは？－」 **鵜澤 加那子 博士**, 北海道大学、オスロ大学
11:45-12:15	ディスカッション ｜ **矢崎 春菜 氏**, **山丸 賢雄（ケニ）氏**, **鵜澤 加那子 博士**
12:15-13:45	❖ 休 憩 (90 分) ❖
13:45-14:05	プレゼンテーション 4「権威と知識のインターフェースとしての博物館 － オーストラリアの経験」 **マイケル・ピッカリング 博士**, 北海道大学、オーストラリア国立大学
14:05-14:25	プレゼンテーション 5「コレクション収蔵庫のマッピング、そして人々の為の場所に」 **ヴァネッサ・ラス 博士**, メルボルン大学
14:25-14:45	プレゼンテーション 6「博物館と祖先の未来 － 文化的仕事の新しいモード」 **ジルダ・アンドリュース 博士**, オーストラリア国立大学
14:45-15:15	❖ 休 憩 (30 分) ❖
15:15-16:00	対 談 「変化する先住民アートセンター・モデル： 西洋のニーズに囚われない文化的表現を取り戻す」 **マヤティリ・マリカ 氏**, メルボルン大学 & **ケイド・マクドナルド 氏**, エージェンシー 司会 ジルダ・アンドリュース 博士
16:00-17:30	全プレゼンターによるパネルディスカッション及び質疑応答
17:30-17:45	閉会のあいさつ **加藤 博文 教授**
17:45-18:00	閉会セレモニー

※日英同時通訳があります

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

Hokkaido University Global Station for Indigenous Studies and Cultural Diversity

プレゼンター紹介

矢崎　春菜　氏

1987 年生まれ。北海道苫小牧出身。
公益財団法人アイヌ民族文化財団、国立アイヌ民族博物館研究学部資料情報室、学芸員。
2019 年、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。専門分野は「アイヌの口承文芸」「アイヌ語」。2011 年より白老町・ポロト湖畔にあったアイヌ民族博物館（ポロトコタン）に勤務。2018 年より公益財団法人アイヌ民族文化財団に勤務し、国立アイヌ民族博物館設立準備室の業務に従事。現在に至る。

タイトル「国立アイヌ民族博物館のアイヌ語に関する取り組み」

要　旨　アイヌ語はアイヌ民族の言語で、日本列島北部とその周辺の地域で話されてきました。しかし明治時代以降、和人による同化政策の影響によって日常生活から次第に切り離されていき、2009 年にはユネスコにより「消滅の危機にある言語」のうち「極めて深刻」な度合いとして位置づけられました。

このような状況のなか、ウポポイ（民族共生象徴空間）では、アイヌ文化の復興・発展の拠点として、アイヌ語を第一言語と位置付けており、主要施設である国立アイヌ民族博物館や国立民族共生公園の施設名や室名などの案内表示等ではアイヌ語を最初に表記し、博物館基本展示ではアイヌ語による解説文の設置も行っています。

その一方で、施設名や案内表示等をアイヌ語で表現するのは容易ではなく、方言、表記方法、新語といったさまざまな課題があり、その検討・決定には、ウポポイ内のアイヌ語担当者だけではなく、アイヌ民族自身を含む、外部のアイヌ語研究者やアイヌ語学習者・実践者も参加しています。

本発表では、このような取り組みの中から、特に案内表示や解説文に関する取り組みについてお話します。

山丸　賢雄（ケニ）　氏

白老出身。29 歳　20 歳のころアイヌの子弟を対象とした 3 年間のカリキュラム「伝承者育成事業」に参加し、総合的にアイヌ文化を学ぶ。その中で言語に興味を持ち、言語についてより勉強するようになる。ＳＴＶアイヌ語ラジオ講座や町民向けのアイヌ語入門講座などの講師も務める。
現在は、ウポポイ（民族共生象徴空間）でアイヌ語体験プログラムの開発、実施をしている。また、趣味で描いていたイラストも仕事に結び、ウポポイ園内の自動販売機などのデザインを担当。

タイトル「祖父、父、私それぞれの役割を持って」

要　旨　このプレゼンテーションでは地元アイヌにとっての博物館施設の重要性について、自分の家系を例にご報告し、今後どのように次の世代につなげていくかを検討していきます。

私から、父、祖父の 3 世代にわたって地元のアイヌ民族博物館で仕事をしてきました。それだけを聞くと、受け継がれているように見えますがそうではありません。

町議会議員をしていた祖父は観光という視点から、父は家庭のためにアイヌ民族博物館で働くようになりました。様々な理由はありますが博物館があったことによって、祖父も父も私もアイヌとしてアイデンティティや文化に向き合うことができました。

ではこれからの世代で地元の方が文化やルーツを向き合うためにはウポポイがどうあるべきかについて自分なりの考えを伝えます。

鵜澤　加那子　博士

鵜澤加那子はアイヌ民族出身の学者、アーティスト、権利活動家です。彼女は AinuToday の創設者でもあり、このグローバルなオンラインプラットフォームは、今を生きるアイヌ文化と生活を伝える役割を果たしています。また、彼女は北海道大学「先住民・文化多様性グローバルステーション(GSI)」の助教授でもあります。近年の仕事は、アイヌ近代美術展企画。アメリカミシガン大学美術館との協力でゲストキュレーターとして主にアメリカの博物館にあるアイヌコレクションについての研究をしています。2023 年には、ノルウェーオスロ大学文化史博物館研究者でもあることから、オスロ大学に所蔵されているアイヌコレクションをもとにイタリア人アーティスト、ローラ・リベラニと共にビデオアート「アイヌプリ：ヨーロッパ博物館でのアイヌコレクション歴史を解きほぐす」の制作も手がけました。また、彼女はニュージーランドの「オルタネーティブ：先住民族国際ジャーナル」の編集委員も務めています。

若い頃、鵜澤はアイヌに対する否定的な表現や差別に直面します。アイヌ民族の対する一般の見方と自身の持つアイヌ民族のイメージがあまりにも違うことに気が付きます。これを機に今を生きるアイヌやその表現方法について考えるようになります。2008 年、ノルウェーの UiT 北極大学で先住民族学の修士号、2020 年に同大学でコミュニティプランニングおよび文化理解で札幌大学ウレシパをケーススタディーとした都市部に住む若いアイヌとシサムに焦点を当てた博士号を取得しました。国際労働機関（ILO）のジュネーブオフィスで、先住民族および部族の権利に関する ILO 政策の促進プロジェクト（PRO 169）でインターンを経験したこともあり、アイヌ権利活動にも力を入れています。又、彼女はアーティストとして、博物館や劇場を通じて先住民族の知識の多面的な表現に貢献し、アイヌのパフォーミングアートや共同研究に取り組んでいます。

タイトル「アイヌ民具と共に踊るー博物館アイヌ民具コレクションの中から見えてくるアイヌらしさとは？ー」

要　旨　このプレゼンテーションでは、博物館におけるアイヌ民族コレクション展示における「アイヌらしさ」と言う言葉の解釈について模索します。博物館に展示されているアイヌコレクションにどのような新しいナレーション（語り）をつけ、新しい表現方法を見出すことができるのか？その議論の幅を広げることによって、アイヌの先住性、アイヌらしさ（Indigeneity）について考えていきます。プレゼンテーションでは、鵜澤が現在手がけるプロジェクトに言及しながら、その課題を考えていきます。1）2026 年にアメリカミシガン大学美術館との協力で行われるアイヌ近代美術展プロジェクト、2）ノルウェーのオスロ大学文化史博物館でのアイヌコレクションに関するビデオアートプロジェクト。これらのケースを見ることでアイヌコレクションの歴史的な背景、そして、どのように私たちの物語を語りながら、それを次世代に繋げていくことができるのかを議論していきます。

マイケル・ピッカリング　博士

北海道大学先住民・文化的多様性研究グローバルステーション　准教授
オーストラリア国立大学　遺産博物館学科　名誉准教授
ケルン大学オーストラリア研究センター（ドイツ）パートナー

2022 年半ばより、マイケル・ピッカリング博士はファースト・ネーションズ遺産を専門とするインディペンデント研究者として活動している。45 年以上にわたり、アボリジニおよびトレス海峡諸島民の団体、州および準州の遺産機関、オーストラリア全土の博物館と幅広く協力してきた。2001 年、オーストラリア国立博物館のレパトリエーション・プログラムのディレクターに就任。その後様々な役職を歴任。2018 年から 2022 年までは、オーストラリア国立博物館のシニア・リパトリエーション・アドバイザーを務めた。

幅広い研究に関心を持ち、物質文化、カニバリズム、定住パターン、博物館展示、博物館倫理、職場の安全衛生、レパトリエーションなどのテーマで論文を発表している。

タイトル　「権威と知識のインターフェースとしての博物館 － オーストラリアの経験」

要　旨　どの博物館、アートギャラリー、大学にも独自の内部文化があり、その内部文化に導かれるガバナンスやプロジェクト実施のシステムがある。すべての文化がそうであるように、博物館もまたそれ自体を再生産し、一般的に、ある特定の問題に対する保守的なアプローチを時間をかけて広めていく。その結果、先住民族の懸念や貢献は、スタッフとして、また外部の利益団体として、往々にして明らかに過小評価されることになる。先住民族の意見は管理され、仲介され、抑えられ、多くの場合、内容が無益にされる。先住民主導の変革は拒絶され、保守的な「伝統的」無害な文化表現への傾向が優勢である。

本稿では、学芸員、研究者、企業経営者としての筆者の経験から生じた問題のいくつかを見ていく。

ヴァネッサ・ラス　博士

メルボルン大学

ヴァネッサ・ラス博士は、博物館・コレクションの先住民コレクション・ディレクター。メルボルン大学人口・グローバルヘルス学部先住民学研究員、西オーストラリア大学バーント人類学博物館アソシエイト・ディレクターを歴任。芸術文化部門において先見的なリーダーシップを発揮し、特にビジュアル・アートに興味を持つ。オーストラリアのアボリジニの文化的知識を後世に伝えるため、それが元々伝えられていたコミュニティの人々への返還を強化する学際的な実践に力を注ぐ。

ラスは、西オーストラリア州キンバリー地域出身のンガリンイン・ギジャ族の女性。最近出版した『ニューサウスウェールズ州立美術館におけるアボリジニ美術の歴史（原題 'A History of Aboriginal Art in the Art Gallery of New South Wales'）』（2021 年）は、アボリジニの世界観からアートと歴史を捉え直すという彼女の幅広い関心に沿って書かれている。ラスは、2014 年度チャーチルフェロー、第 1 回アジアリンク・リーダーズ・インディジナスフェロー（アジアリンク）、メルボルン大学アボリジニ・トレス海峡諸島民文化遺産監視委員会委員長でもある。

タイトル　「コレクション収蔵庫のマッピング、そして人々の為の場所に」

要　旨　博物館には展示スペースやカフェ、誰も足を運ばない収蔵庫などがある。今日、アボリジニの文化資料が展示されている博物館には、収蔵庫の見学と言うものがある。長老と一緒に訪れれば、特別楽しむことが出来る。長老は、収蔵作品を見ながら、その作者の歌や、その作品が生まれた地方を思い出しながら歌うかもしれない。彼らが去っていくとき、その作品たちも彼らに会えて喜んでいるように感じられる。メルボルン大学が先住民コレクションの新たな拠点に向けて取り組む中、「先住民の芸術と文化のための場所」の戦略は、作品にも感情があるという原則で始まった。この論文は、この取組みをひもとき、深い分裂の時代にオーストラリアのアボリジニの人々にとって最良の新しい博物館モデルを提示する。

ジルダ・アンドリュース　博士

オーストラリア国立大学　博士研究員　ユワワララライ／ユアハライ民族

ジルダ・アンドリュース博士はオーストラリア、キャンベラを拠点に活動する先住民族ユワワララライの女性であり、文化実践者、研究者である。

ジルダは自身が生まれ持った立場から、土地、物語、文化と博物館収蔵品とのつながりを調査している。物質文化とそれにまつわる物語に焦点をあてる彼女は、カストディアンシップの定義を、作品の保存に焦点をあてたものから、作品とそれを生み出すシステムとのつながりを維持しようとするものへと押し進め続けている。

タイトル　「博物館と祖先の未来　－　文化的仕事の新しいモード」

要　旨　このプレゼンテーションでは、「クールバーニング」として知られる先住民の土地管理法の原理に沿って開発された、博物館のコレクション調査の新しい方法を紹介する。ここでは、再生可能な文化的土地管理の実践を、博物館のアーカイブやコレクションという、複雑に絡み合い、大きく膨れ上がった環境にも広げて適用する方法を探る。コレクション研究を「再生的」なものとして考えることで、文化資料を現代的な道具として、また新たな知識を生み出す活動的なものとして、生産的に捉え直すことが可能になる。このようなアプローチは、歴史的コレクションに、強く継続的な文化の未来をつくる過程で重要な役割を与えると考えられる。

マヤティリ・マリカ　氏

メルボルン大学

マヤティリ・マリカはアーネム・ランド北東部を拠点とするリラツィングの伝統的所有者であり、ヨール族の女性である。

マヤティリは現在、メルボルン大学の執行部付で先住民戦略に携わっている。彼女はコミュニティ、草の根団体、政府機関で、保健、司法、教育の分野で働いてきた。マヤティリは、文化、アイデンティティ、土地の権利を将来の世代まで確実に存続させるために、ヨール族のための具体的な教育パイプラインを作ることが必要だと信じている。

マヤティリはガルマのプロダクション・マネージャーを 10 年以上務めている。彼女はこの大規模なファースト・ネーションズ・フェスティバルのすべてのイベント・ロジスティクスを監督し、文化的プロトコルが守られるよう、多様なステークホルダーと協力している。

マヤティリは、オーストラリアの偉大な芸術的・政治的力を持つ名家のひとつに属している。父親はワンジュク・マリカ OBE、祖父はマワラン・マリカである。彼女の父はアボリジニ・アートの国際的認知に尽力し、先住民文化を広めるために世界中を飛び回った。オーストラリア・カウンシルのアボリジニ芸術委員会の委員長として、ブク・ラーンガイ・ムルカ・センターの設立を提唱する重要な役割を果たした。マリカ・ファミリーは、マダイン展をはじめ、世界中の博物館のコレクションに強く表れている。

ケイド・マクドナルド　氏

エージェンシー（Agency）CEO

ケイド・マクドナルドはエージェンシー（Agency)の CEO であり創設者である。エージェンシーは、先住民の文化指導者と Agency 理事会のメンバーの全面的な支援と許可を得て、特定されたニーズに応えて設立された非営利団体である。

Agency 設立以前は、ドゥルム・アーツ・アボリジニ・コーポレーション(Durrmu Arts Aboriginal Corporation）のエグゼクティブ・ディレクターを 3 年間、ブク・ラーンガイ・ムルカ芸術文化センター(Buku-Larrnggay Mulka Arts and Cultural Centre）のコーディネーターを 6 年間務めた。また、文化コンサルタントとして数年間、アーネム・ランド、キンバリー、ティウィ諸島で活動し、コミュニティ・リーダーと協力して文化維持・返還プロジェクトを実施してきた。

ケイドは、先住民の現代美術に関する知識を評価され、芸術省、オーストラリア芸術評議会、クリエイティブ・ビクトリア、NT 芸術省視覚芸術委員会の視覚芸術助成金選考委員に任命され、現在は、連邦政府と通信芸術省を代表して、可動遺産法における先住民文化財の専門審査員に任命されている。メルボルン大学ビジュアル・アート・センター（CoVA）の名誉研究員でもある。

テーマ　「変化する先住民アートセンター・モデル：　西洋のニーズに囚われない文化的表現を取り戻す」

要　旨 あまりにも長い間、オーストラリアの先住民のアートセンターは、主にアート制作と販売の基盤として評価されてきた。その背景には、オーストラリアのアート産業の隆盛と、先住民のアートや工芸品制作に対する世界的な需要の高まりがある。

今日、先住民主導の企業としてのアートセンターは、ダイナミックな文化的成果を生み出すさまざまな重要な文化活動をサポートするまでに発展した。そのうちのいくつかは市場の需要にこたえるためで、その他の成果としては、先住民の知識の包括的なアーカイブ、図書館、重要な文化資料のコレクションの保管所などがあり、その一部は今日でも儀式や文化的実践に使われている。

アートセンターがこのようなアーカイブの役割を担うようになるにつれ、継続的な管理、閲覧、保存、保管、返還など、博物館のコレクションに対する組織の権力と管理に関する問題が生じている。今日、革新的で協力的な解決策は、博物館よりもむしろ文化的指導者たちによって始められ、受け入れられているが、議論は財産、所有権、資源の概念をめぐる西洋の制約によってまだ制限されている。

この司会進行による対談では、進化し続けるアートセンター・モデルの中で、先住民の自己決定を支援するために必要な現代におけるいくつかの例と、コラボレーションの新しいあり方を探る。